



行かな
かった
場所

川崎ゆきお

「行かなかった場所について考えていた」

長老は厳かな声で語り始めたが、この人は若い頃から、そういう声だ。

「行かなかった場所の方が多いのではありませんか」長老の庵に来ている幹部が言う。

「どういうことかな」

「考えなくても分かりますよ。世の中、行っていない場所の方が多いです。旅行などでもそうでしょ。ある観光地を訪ねても、省略した場所もあるでしょ。時間がないとか、そこからは遠いとか」

「君はごねるねえ」

「いえいえ、そうではありません」

「きっとそうだ。何故そう逆らう」

「普通です」

「そうだったかな、それが君の気性だったか、しばらく来ないんで忘れていたよ」

「名所旧跡近くで食事をとるとき、入らなかった店の方が多いでしょ。何軒も並んでいる中の一軒を選ぶ。それ以外は行かなかった場所です」

「そうでなく、ここでは行けるが、行かなかった場所だ」

「そこは気に入らないので、行かなかったのでしょ。行きたければ行けた」

「それぞれ、それを言っている」

「はいはい」

「行きたい行きたいと思いながら、行けなかった場所もあるし、行けるのだが、行きたくない場所もある。最近そのような場所が気になってなあ。今から行ってももう終わっていたりするし、なかつたりする」

「パーティーなんかはそうですねえ」

「そうそう、そう言うことだ」

「僕もこの庵に行きたい行きたいと思いながら、なかなか行けませんでした」

長老は笑顔を見せる。なぜなら今日は来ているのだから、来れないまま放置したわけではないからだ。それほどこの長老は人気がなく、勢いもなく、訪ねる人も少ない。

「僕は今日、この庵を訪ねたのは、暇だったからですが、たまには顔を出したかったからです。ずっと気になっていましたし」

「よしよし」

「もう少しで行かなかった場所になるところでした。そして、何度も何度も行かなかった場所となりました。顔を出そうと思いながらも、忙しくて、スケジュールが取れなかったのです」

「今日は優先的にここを選んでくれたのだな」

「何も入ってませんでしたから」

「ここは暇庵と呼んでおるのを知ってるか」

幹部は、下を向いて苦笑した。

「その笑いは何だ」

「いえ、長老もご存じだったので」

「まあな」

「ここは行けなかった場所、行かなかった場所のまとめ行きなのです」

「まとめ行き？」

「行けなかった場所の代表として、行けない詣でとしています」

「なんじゃそれは」

「忙しくて行けなかった席が幾つもあります。それらの供養です。ここで、全ての非礼や悔やみを洗い流すのです」

「君」

「はい」

「ここはそういう場所ではない。幹部としてたまに顔を出すだけの場所だろ。もうここはサロンではなくなっているがな。ここに来たというだけで、義理堅いに人間と見られるはず。決して来て損はない」

「はい、そうなのですが、ご機嫌伺いは本当です」

「では、行けない詣でとは何だ」

「ご機嫌伺いと共に、行けなかった過去の供養もついでに果たすためです」

「君は相変わらずごねるねえ」

「屁理屈じゃありません。正直に僕の気持ちを伝えているだけです。先生もなされては」

「何を」

「ですから、行けなかった場所が多くあると思っておられるのでしょ」

「あるが、では、何処へ行けばいい。そのまとめ詣でのような……」

「それは先生の先生を訪問されればいいのか」

「もう鬼門に入っておる」

「ああ、そうでしたねえ」

「しかし、行けなかった場所は、敢えて行けなかったんだ。行ってやるものかと思って行けなかった。悪いことをした」

「悔やんでいますか」

「いやいや、行っておれば面倒なことになっていたかもしれない。だから、行けなかったんだ」

「それは、よくあることですよ」

「そうだな」

その後、幹部は小一時間ほど世間話をし、この派閥の長老のご機嫌を取った。

「では、このあたりでお暇を」

「ああ、よく来たなあ」

「はい」

「それで、落ちたかな」

「はい、効きます。他の非礼も落ちました」

「うむ」

了